

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町岳陽高等学校

## 山岳部顧問とかけて雷鳥と解く

今年度の高体連長野県大会が、6月2日から4日の日程で開催された。参加校が20校（男子20校、女子11校：オブザーバーも含む）参加者総数は240名を越えた。昨年が199名だから、およそ2割の増加ということになる。長野県では高校生数が減少する中、明らかに高校山岳部員は増加している。そしてその割合はかなり高いと言えるのではないかと。ここ5年くらいの推移を見ると、これは一過性の減少ではないように思われる。参加者数の最高は松本県ヶ丘高校の30人を筆頭に、大町岳陽25人、松本深志20人、飯田OIDE長姫16人、飯田15人と続く。松本地区では、3年前に廃部になっていた松本蟻ヶ崎高校が同好会として復活し、今年はチームが結成できるまでに育ち、飯山高校も初出場を果たした。

こうしてみると、山岳部に対して、明らかに高校生のニーズはある。クラブがあれば明らかに生徒はその門をたたく。となると、受け皿の問題を問わねばなるまい。蟻ヶ崎



や飯山の例は極めてまれなケースである。私が教員になったころには、長野県にはほぼ半数の高校に山岳部が存在していた。そのころは、若い教員はみな山岳部顧問にあてられ、わけもわからず針ノ木で行われる山岳総合センターの高校生研修会に生徒とともに参加し、先輩からあるいは山岳協会の指導員から山のイロハを教わった。これを先途に初任校で生徒とともに、培った技

術は、転勤先でも活かされた。なぜならそこにも山岳部があり、活かす場があったから。しかし、今はそうはいかない。高校の教員の数も減り、どの学校もクラブが顧問を決めるのにかなり苦労している。そんな状況だから、危険で専門性を伴う上、生徒と一緒に行動しなければならない山岳部の顧問になるのなどまっぴらごめん、そんなところに志願するのはきわめて奇抜な人種である。そんなわけだから新たに山岳部などできるはずもない。ニーズはあるというのに・・・。



山岳部顧問と書いて、「雷鳥と解く。その心はどちらも絶滅危惧種でしょう。」笑い話ではない。深刻な話である。よく言って10年、悪くすれば5年で確実に長野県内で冬山も含めて総合的に山岳部の顧問を務められる顧問はほぼ絶滅する。とって、今活発な活動をしている山岳部で顧問を養成しても、山岳部のある学校に赴任できる確率は極めて低く、山岳部のない学校では、せ

っかくのノウハウも活かすすべもない。こうして山岳部の顧問は絶滅危惧種への道をまっしぐらに突き進んでいる。なんとかせねばとの思いは強い。

今年の県大会で、小生は審査員長を務めた。審査員の選出に当たって、かなり大胆に人選を行って、はじめて審査をする人や、これからの長野県の高体連登山部を背負って



いってほしい先生方に積極的に審査員になっていただいた。それまで続かわからないが、2030年には順番から言って、長野県でインターハイの登山大会を開催することになる。14年後ことを言ったら鬼が笑うかもしれないなどと呑気なことを言っはられない。今、登山部を引っ張っている顧問はほ

とんど50代を越えており、その時には、皆当然リタイアしている。だから、林修先生ではないけれど、顧問を養成するならば「今でしょ」というのが私の現在抱えている喫緊の課題なのである。

審査員には、文化を伝えるという意味で、新しい人の他に、高体連OBとして松田大氏と重田肇氏にもはいつていただいた。こうして、今年の県大会の審査員会を組織した。僕は、県大会というのは、競技以前に「高校山岳部の安全登山のスタンダード」を確認する場だと考えている。その意味で、審査をする顧問は、そのことに熟知し、自らが安全登山の実践者でなければならないと考えている。審査員の皆さんにはそのようなことも伝えて今年の県大会を行った。この考え方が少しでも浸透していってくれるとありがたい。そのために今年は参加者の少なかった伝統あるセンターの高校生登山研修会や、指導員検定を受ける先生が出てきてくれることを期待している。もちろん来年すぐに成果があがるということでないのは承知の上。現在は、現役では指導員資格をもっている（かつて持っていた）人は長野県には、4人しかいない。これも数年のうちに二ケタにはしたいと思う。長野という素晴らしい場所から高校山岳部という文化をなくなってしまわないように・・・。

## 編集子のひとりごと

長野県大会は、晴天に恵まれ素晴らしい大会になった。結果は、男子が1位大町岳陽、2位は松本県ヶ丘、3位に屋代。女子は1位が松本県ヶ丘、2位大町岳陽、3位に屋代。宇男女とも1位が岡山県蒜山・毛無山で行われるインターハイ、2位3位が富山県立山で行われる北信越へと駒を進めた。そんなわけで、手前味噌ながら、小生にとっては嬉しい結果だった。旧大町高校に赴任して3年、私の赴任と同時に入学して来た3年生は、旧北高の生徒も含め、気心の知れた生徒たちだった。男子は3年生が4人、頑張ってくれた。また人数がそろわなくて大会に出ることも叶わなかった女子が今年は頑張ってくれたのは来年へつながる結果だった。

同時に生徒たちにとって、松本県ヶ丘の生徒たちはまさに良きライバルということとともに高め合ってきた。競技中はどちらもピリピリしていたが、競技終了後は、どちらからともなく誘い合って、隣にテントを張り、健闘をたたえあっていた。その意味ではこれからも長野県内の高校山岳部の活動を一緒に引っ張っていきたいと思う。（大西記）